Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2001.10
発行者：中島 秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

NO.20

CONTENTS

・ 第６回研究会展覧会［光への探求］近づく
・ 中島秀雄写真展決定
・ 米国撮影紀行（前編）
・ ５月撮影会参加報告
・ 静物撮影会について
・ ドライマウント講習会
・ インフォメーション

第 6 回研究会展覧会［光への探求］近づく

中島　秀雄

今年は、我々の定位置であったギャラリーオリーブの閉鎖で、新たに会場を移さなければならなかった。しかし、昨年の第 5 回展で一つの区切りをつけていて、新しいスタートを切るということから大きな影響はないと考える。そして、急ぎ探し当てたギャラリー青山は、現代アートを中心に活動しているギャラリーで、立地環境も十分だし以前から私も個展をやってみたいと思っていた。

環境、展示空間、照明、オーナーも変わり、写真に対する評価も違ってくるかもしれないが、我々も新たな気持ちで取り組みたい。

新たにスタートする意味で、サブタイトルを変えることにした。我々にはすでにファインプリントというタイトルを持っているが、この言葉は我々の表現を代表する普遍的な言葉だと考える。そして、我々の光りに対するこだわり方を分かりやすくするために、サブタイトルを付けて来た。変えずにずっと続ける方法もあるが、新たな言葉を考え出すことも必要なことだ。“光へのまなざし”は、ある意味で我々のこだわりを十分満たしている言葉で、これに変わる言葉探しは大変だった。“探求”はさがしもとめることで、光にこだわり、ゾーンシステムをより強く追求し深めるという意味にもとれると私は解釈している。

今年は創作的な意味を強めるということでスタートし、静物写真にも取り組んできた。集められた写真を見ると静物写真や、被写体を求めて積極的に行動してくれた様子も見られ、イメージに広がりを感じた。そして、新しい会員による力作も見られ、今から全体を眺めるのが楽しみでもある。しかし、人物写真が少ないことは確かで、全体に少し硬いイメージになるかもしれない。

すでに作品のセレクションは終わり、これからは一人一人のプリンティングの力量にかかってくる。撮影したネガから、創造的なプリントをつくることが我々の大きな目的で、これは一夜にして出来ることではない。そのためには、日頃絶えず繰り返しプリントすることが大切で、締め切り直前にプリントしても十分な作品は出来ない。また普段多くの優れたプリントを見ることがなによりも大切なことで、このことによって優れたプリントを見る目が出来てくる。アダムスやウエストンのオリジナルプリントを見ることや、写真集も大いに参考になるが、結局は自己のプリントにどれだけ情熱を傾けることができるかにかかっている。

来年はアンセル･アダムス生誕100年にあたり、様々な企画が予想される。

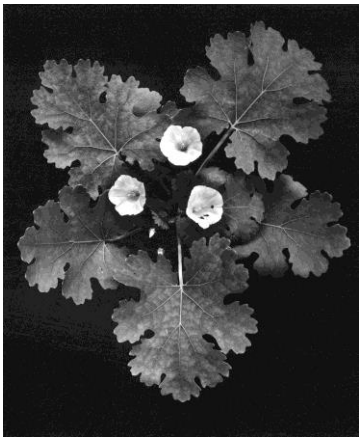
デジタル表現が巷を賑わしている時代に、これからも銀塩写真が根強く求められるとしたらアダムスによって革新的な改良が加えられた銀塩写真術であるゾーンシステムに、我々はより広くより深く進めていく責務があるかもしれない。

第６回研究会展覧会出品予定作品より

畑　文夫

内田　順

中島　秀雄



藤枝　義弘

内田　順

中島秀雄写真展決定

中島秀雄

東京工芸大学・写大ギャラリーにおいて私の展覧会が決定した。

大学を卒業して今年で 33 年になる。偶然にも細江英公氏の助手になり、様々な経験を経て今日にある。写大ギャラリーは、写真大学の時代につけられた名前で、工芸大学に名称が変わってもギャラリーの名前はそのままになっている。最初の展覧会は確かウイン・バロックの展覧会だったように記憶している。Child in forest を 8X10 で複写し、来客に渡して好評だったことを覚えている。それ以来世界を代表する数々の作品展が開かれ、研究会として尋ねたこともあり、ここから多くの事柄を学んできた。写大ギャラリーで多くの作家の素晴らしい作品を見ることはあっても、私の作品をここに展示することなど考えたこともなかった。

数年前から声がかかっていて、私としてはもう少し先にと考えていた。しかし、大学を卒業してすでに 30 年も写真をやっていたことに気がついた。しかも、作品を作り続けていたことに正直言って私も驚いてしまった。写真を続けている同輩はいるが、作品を撮り続けている人は知らない。作品を撮り続けるという気持ちを持続させたきっかけはもちろん細江英公氏の助手時代である。

オリジナルプリントとの出合い

1969 年の真夏、芝浦の倉庫での仕事は私にとって忘れることが出来ない。それは、翌年に始まるジョージ・イーストマン・ハウス・コレクション展の図録制作のための撮影だった。ウイン・バロック、アンセル・アダムス、ハリー・キャラハン、エドワード・ウエストン等の世界を代表する作品で、日本にやって来た最初のオリジナルプリントではないかと記憶している。プリントを額からはずすことが出来ず、ガラスが着いたまま、慎重に、そして、正確に撮影しなくてはならず、4X5 カメラの前にセットした反射を防ぐ大きな黒紙とフラッド・ランプの熱で大変な現場だった。そのときに見たプリントには、それまで見たこともない美しさを感じ、大学を出てまもない私は大変な場に立ち会っているこの幸運に身が引き締まる思いだった。私もいつかここまで行きたい。そんな気持ちで真夏の倉庫の暑さなど忘れていた。ここが私のプリントの出発点だったのだろう。

今回は、70 年代に撮影した藤田昭子女史の作品、

“藤田昭子の原風景”　銀座画廊春秋。

80 年代にまとめた“Natural landscape”

ＰＧＩ

90 年代の　“River”

ギャラリー・オリーブ

“Range of light”

ギャラリー・オリーブ

“River Nude”

ギャラリー・オリーブ

“Botanical”

ギャラリー・オリーブ

その他

50 点前後の作品になる予定で、多くはすでに発表した作品だが、始めての発表作品もあるかもしれない。いずれにしてもこれだけの作品を一度に見ることは私も始めてです。今から楽しみでもあり、身の引き締まる思いでもある。

私が工芸大学にいたことが細江英公氏との出会いであり、他の大学にいれば出会いはあったとしても助手の声はかからなかっただろう。また、アダムスを知り、マイナー・ホワイトのゾーンシステムマニュアルを見つけたのも細江スタジオ

だったし、これほどアダムスにこだわったかどうかも分からない。そして、細江氏は工芸大に戻って教授になり写大ギャラリーを創設し、私はその手伝いを助手時代にしてきた。そして、一回りして私がそこに作品を抱えて戻ることになった。考えてみると本当に幸運な道を歩んできたと思っている。

あきらめずに続けてきたことが、一つの結果に結びついたと思っているし、最近は研究会での活動が私の心の支えになっていることも事実です。

今回の展覧会が、研究会の発展につながり、会員一人一人の更なるグレードアップになることを願っています。

米国撮影紀行（前編）

中島秀雄

我々が到着した6月のカリフォルニアはちょうど乾燥期にあたり、上空から見たサンノゼの街はその周囲を乾燥した黄金色の丘に囲まれ、砂漠の都市に来たような味気なさを感じた。高度を下げるに連れて街を走る銀色のハイウェイが何本か見え、私は、着陸寸前の機内で地図を広げ、これから走る道がどれなのか懸命に眺めた。

タラップから降りると目前に入国審査場があり、観光客の少ない審査は短時間ですんだ。しかし、到着ロビーはまだこの先にあり、バスで到着ロビーまで行かなければならなかった。受け取った荷物を再び係員に渡すと、彼は、投げるようにトロッコに積み込んだ。

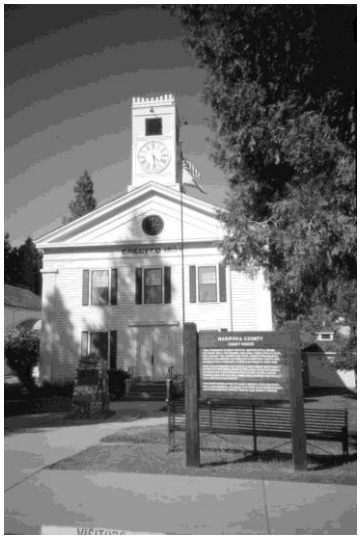
いつものことだが、レンタカーを自由に操るには、正確な地図を手に入れることで決まる。私は地図を元にアベニューとロード、そして、街の名前と周辺の環境を確認するイメージトレーニングを日本で行ってきた。しかし、目の前にハイウエーがあっても、レンタカーの広い駐車場からいざ外に出る道さえ分からず、これはもう誰かに聞くしかなかった。近くにいる日焼けした中年の電機工事士に詳しく説明してもらった。彼は、[私が、今日ここにいて君はラッキーだったよ!!この近くに住んでいるからね。] といった。

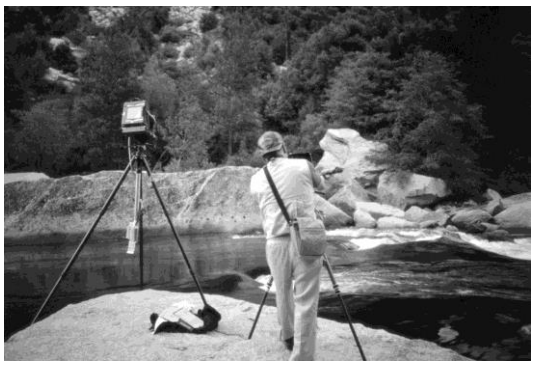
今回のサンノゼ、ヨセミテ間を走るのは初めてで、サンフランシスコ回りより 40 キロ程近いということで決めた。しかし、走ってみると近いという印象はほとんどなく、広大な牧場と乾燥した丘を延々走ることは変わらなかった。途中、特に印象に残った光景といえば、丘の窪地に作られたおよそ 10 キロ四方の広大な人造湖だ。湖とはいってもヨットが浮んでいるわけでもなく、キャンプ場があるわけでもない。私には原油貯蔵庫のようにしか見えなかった。もともとカリフオリニアは水が少なく、19 世紀に運河やトンネルを掘って水を引いている地域である。ここは眺めるだけにして、直線の下り坂を 80 マイル近いスピードで走りぬけた。

地平線の彼方に一筋の煙が見え、我々はその方向に向かっていた。最初はインデイアンのノロシのように見えた煙はしだいに大きくなり、青空を汚し、ここエルニドの街に近づくにつれてゴムの焼ける匂が鼻についてきた。街外れの廃材置き場が火事のようで、我々が到着したころには鎮まり、煙で淀んだ街にサイレンと人の動きが目立った。この乾燥しきった空気の中では、炎はひとたまりもなくすべてを焼き尽くし、消防はせいぜい延焼をくい止めるのがやっとのことだったに違いない。以前カラー写真で見たことがあるが、この国では場所にもよるが、家は取り壊さず消防の許可をもらって燃やすことが出来るという。永く住み慣れた我が家に火を放つというこの神経に、複雑なものを感じたことを覚えている。この出来事のせいか、学校の正門には子供達で溢れ帰宅を急いでいた。大勢の子供を見たのは、このときが最初で最後だった。歩道を含め 50 メートルはあろう道路を挟んで両側には、レストラン、マーケット、銀行、雑貨屋と続き、一歩奥に入れば緑に囲まれた静かな住宅街になる。そして、住宅街を抜ける

と、その先は地平線まで続く広大な牧場と畑になる。これがアメリカの田舎街だ。

マリポサの街に着いたのは 4 時を少し回り、結果として前回より 1 時間程早く到着したことになる。私は、いつもマリポサの街に立ち寄ることにしている。ここには、アダムスが撮影した美しい裁判所の建物があるからだ。1854 年に建てられたこの建物は、開拓時代を感じさせるコロニアル様式。外壁は白のサイデイングにダブルハングの窓。そして、屋根にはローマ数字の時計台が取り付けられ、この街のシンボルのようになっている。アーリー・アメリカンの建築に興味のある人なら、いつまで眺めていても飽きないだろう。この建物は、カリフォルニアの東で現在も使われている最も古い裁判所で、建物の正面は建てられた当時のままの姿で残り、建築資材は近くの山から切り出し、窓枠や釘も手作りになっている。当時の金額で 9600 ドル。時計はイギリス製で中に据え付けられた鐘は 100 キロ近くあり、正確に一時間ごとに鳴らし続けている。そして、前回にも書いたように時計の文字はローマ数字になっていて、ゾーンの数値はこれがヒントになっているのではと思っている。又、この建物が建てられた 1854 年の日本の歴史を見ると、ペリーが再び浦賀にやって来て、日米和親条約が結ばれた年である。日本の歴史と重ねて眺めると、この建物も今までと違って見え、実に親しみが湧いてくる。しかし、私は時間がなく、撮影許可をもらうために事務所に入っただけで、内部を詳しく見聞できていないのだ。





今日の宿泊地エル・ポータルまでここからまだ 30 キロあり、明るい内に走りたいと思った。曲がりくねった川沿いの細い道を 40 マイルのスピードで走らなければ後ろの車に追いつかれてしまう。

安全にゆっくり走るのではなく、安全に早く走るのだ。なぜそれほどスピードを出すのか。それは、日本とは距離感が決定的に違っているからだろう。この先 30 キロまで休息の場はないのだ。

我々はロッジにチェックインを済ませ、ヨセミテ公園に向かった。そして、満席に近いレストランにすべり込み、ビールを飲み、肉を食った。ほんとうに長い一日だった。

自然の風景を被写体にする者にとって、ヨセミテ渓谷を流れるマセード川を無視して先に進むことはできないだろう。シエラの山並みに積もった雪が春に溶け出し、バーナル滝やネバダ滝となって一気に下り、巨石や巨岩に激しくぶつかりヨセミテ公園に流れ込む。この自然の恵みを求めて公園を訪れる年間３００万人もの観光客を魅了し、マセード川となって公園を出て行く。そして、谷筋から集めた水を加えて水量を増し、新緑の柳の木やセコイヤ杉の根元を流れ、流木や点在する

大小の岩によって流れの向きを変えて下って行く。岩の形や大きさ、そして、色さえも実に変化に富んでいて見ていて飽きることがない。じっと見ているだけで、ここまでやって来た苦労も忘れてしまう。それは、何と言っても渓谷のスケールが川全体を明るいものにし、開放感を与えているからでもあるだろう。

私は、日本で長いこと川の周辺を歩き、写真を撮ってきた。日本人は古くから水を巧みに利用し水の文化を築いてきた。しかし、ともするとそれは暗く陰湿な面もあって、私は好きになれない。文学や歴史の中では賞賛できても、できるだけ陰湿な空間や水の伝説といった意味は避け、写真のイメージにはしたくなかった。このマセード川には陰湿なイメージはまったくない。

我々は、この変化に富んだマセード川にカメラを向けずに先に行くことはできなかった。水量が少ないことから、岩を越えて水に近づくことができた。ゆったり流れているように見えた水も、近づいて見るとその流れは強力で、2m はあろう水の深さに怖いものを感じた。我々は、この流れにしばらくレンズを向けることにした。

タイオガパスの分かれ道でガスを補給し、休息もとった。ここにくる途中に枯れた杉林があり、カメラを担いで歩いたが、光線が強く写真にならなかった。露出の値はマイナス 3～4 と出た。また、この先に雷による山火事の跡があり、いつかじっくり撮って見たいと思っている。林を撮るには柔らかい光が絶対で、陽が出る前か曇りの日、又は、夕方しかない。

今回、テナヤレイク周辺の山に少し登ることになっていた。ウエストンの有名な巨木の写真はこの近くで撮影されていて、現在もその木があるのか確かめたかった。見通しのいい山はどこからでも登れ、比較的楽に山頂にたどり着いた。しかし、窪地の向こうには切り立った岩山が立ちはだかり、我々の行く手を遮っていた。なだらかな窪地には巨石が点在し、地表には水の流れた跡がはっきり残り、大雨のとき水はここを一気に流れ下るのだろうと想像できた。道路から見上げただけでは想像も出来ない光景で、時間をかけてロケーションする大切さを感じた。ウエストンは 1937 年にこの周辺で撮影しているので、60 年以上経っていれば気象の激しいシエラの山では風景はたちまち変化してしまうのだろう。巨木は見つからなかった。ただ、似たような背の低い杉の木はあって、ウエストンはワイドレンズを使って巨木に見せていてのではないかと、よけいなことを考えてしまった。私は、窪地にある巨石と山項から湖や山の写真を撮った。7 時を過ぎているのに光はまだ明るく、撮影には十分だった。月が上空に見え、すごく充実した時が過ぎようとしているように感じられ、このままここで野宿してもいい、そんな気分でもあった。リーバイニングに到着したの

は夜の８時を回っていた。受付カウンターの老夫婦は、遅い我々の到着を待っていた様で、わざわざ外に出て車を誘導してくれた。

５月撮影会参加報告

圓子靖也

今年の野外撮影会は、信州・安曇村は”乗鞍高原”で、新緑あり、山あり、滝ありの風景撮影を、中島先生指導の下で行なった。

参加者:中島先生、赤羽、小野、木下、菊池、鈴木、田中、藤原、古川、松本、宮岡、圓子

日　程:平成 13 年 5 月 12～13 日(土・日を利用した 1 泊 2 日の行程である)

以下その行状記をﾒﾓ風に辿って見る。

初日(5/12)：松本電鉄・新島島駅前 10 時集合　参加者有志の車 5 台に銘々分乗し、新島島駅前を略定時に出発し、1 時間後に最初の目的地・番所大滝に着いた。

滝壷近くに行くのに急な坂道を各自重い機材を担いで下りるという難行苦行の末、やっと辿り着き大滝の水飛沫を避けながらの撮影開始。　次の撮影地に移動し、2 番目の滝である”善五郎の滝”を各自思い思いに撮影。ここでも水飛沫に悩まされ、愛機のレンズを拭き拭きの撮影となった。

初日最後の撮影場所は”牛留池”を経由し”一ノ瀬園地”へと移り、夕焼けに染まった乗鞍岳の山並みをﾓﾉｸﾛ・ｶﾗｰのﾌｨﾙﾑに収め、朝焼けになった時の情景を思い浮かべながら、明日、早朝撮影に再度来ることを誓って第 1 日目の撮影会は終了し、宿泊先へ向かう。

宿泊は乗鞍高原温泉ﾋｭｯﾃ　ほし　にお世話になった。夕方 5 時頃には到着し、部屋割りの後、各自温泉に入ったり明日への準備を怠りなく、ﾌｨﾙﾑ(昔はｶﾞﾗｽ乾板で種板と言われていたとか)詰めかえ等をやって 7 時の夕食を待った。

夕食は、当館の星夫妻御自慢の地元山菜料理に舌鼓みを打ちながら、簡単に各自、自己紹介を行っているところへ蕎麦打ち名人である赤羽さんが参加して頂き、一層の盛り上がりをみせた。赤羽さん本人は早速、厨房入りし、自ら盛付けをして下さり全員で賞味‥‥蕎麦と山菜づくしの天ぷら料理を充分頂きご馳走様でした。

第 2 日目(5/13)：4 時半起床　一ノ瀬園地から日の出直前の山並みの朝焼け風景をものにすべく出発 6 時頃まで撮影。その後”三本滝”を下見する班と一旦宿へ帰る組とに別れ、下見班(中島先生、松本さん、木下さん、圓子)四名は三本滝へ向った。ところが三本滝入口までは良かったが、その先はまだまだｱｲｽﾊﾞｰﾝ状の固い残雪に覆われ、道なき道と化していて、歩き難く、時には足をとられて転倒も想定されるので、特に大判機材を担いでの往来は危険を伴うと言う事で途中から引返えさざるを得なかった。三本滝入口まで戻った一行は、ここで機材をひろげ撮影につかの間の没頭‥‥‥後日ﾌﾟﾘﾝﾄが楽しみ。　八時・朝食までには全員集合し九時まで、ゆっくり朝食を済ませた後ﾁｪｯｸｱｳﾄ。泊った星さん宅の近くで裏側に当たる方向に先生が、食後の散歩しつつ撮影ﾎﾟｲﾝﾄを見つけ、結局ここで 11 時過ぎまで撮影を展開し、のどかな山村風景を脳裏とﾌｨﾙﾑに収めた。

次に向かった所は、地元の地理に大変詳しい赤羽さんの案内と誘導による高原遊歩道を散策しながら各自好みの View point を見つけ約二時間程の道のりを歩いた。　とに角、前日からの 2 日間

とも5月中旬とは思われない位の好天候に恵まれ、真夏の陽気を凌ぐ暑さだった。 撮影には最悪のﾋﾟｰｶﾝ状態であった。

一寸遅めの昼食は、赤羽さん手配・段取りによる野外ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｳ・ﾊﾟｰﾃｨ会場に案内され(奈川村施設)、暑い道程を歩いた後の喉を潤した次第である。 しかし、ここでは暑い最中にもかかわらず前後左右からの火あぶり刑よろしく炎天下に加えて火責めにあった状態であったが、ビールの美味さに助けられた感があった。

その後は、当地の施設にある温泉に入りのんびり・・・・・・・・・ﾋﾟｰｶﾝは寝て待ての喩え(こんな喩えあったかな?)の如く、施設の広間を借用して即昼寝ﾀｲﾑとあいなった。

※ここで問題：このグループは何をしに行ったのでしょう・・・・・・・・

仮眠で小休止の後は充分鋭気を養った各名ﾄﾞﾗｲﾊﾞｰの腕を信じつつ、三々五々帰途に着きました。安全運転有り難うございました。

最後になりましたが、ご本人は行けなくて残念ではなかったかと思いますが、本企画の立案と同時に宿泊先の手配等で苦労された、広報担当の畑さん、そして車の提供とﾄﾞﾗｲﾊﾞｰを引き受けて頂いた皆さんどうも有り難うございました。本当にお疲れ様でした。それから、赤羽さん、星夫妻達の心尽くしのもてなし料理ご馳走様でした。 参加者の皆さんもお疲れ様でした。

あとは、D.P.E.の出来具合あるのみですね。あァ～しんど 〈了〉

静物撮影会について

（７月２８日ランドマークタワー
１３Ｆセミナールームにて開催）

田中　肇

４月の鈴木秀ヲ先生の静物撮影会に次いで、第２回目の静物写真撮影会が催されました。
これは写真展の作品作り加速のためということで、中島先生が率先して催されたものですが、先生が静物写真を極めて重視されているからだと思われます。
ご承知の通り、ウエストンやアダムスにはすばらしい静物写真を残しています。我がゾーンシステム研究会は、どちらかというと「コト」よりも「モノ」に意味を見出して写真を鑑賞し創作する集団ではないかと思われます。その意味でも、我々の研究テーマとして静物写真は必須の課題の一つであるといえるでしょう。

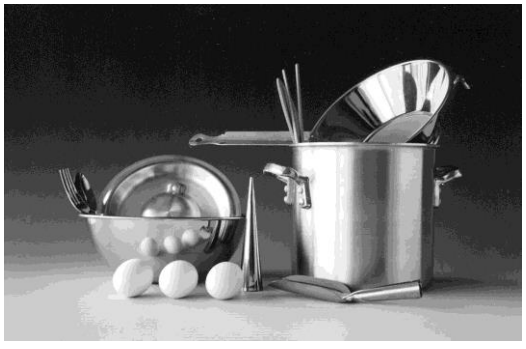
私は新会員ということもあって、できる限り会のイベントには参加しようと決めているので、今回も参加しました。それに私は静物写真にもともと関心を持っています。普段から新聞や雑誌やカタログなど、静物写真で気になるものや目を引いたものがあれば切り抜いてスクラップしています。構図やライテイングなど訴えてくる写真ならば印刷の質は問いません。とても参考になります。タイトルはズバリ「BUTU」としています。つまり静物のブツです。

今回、参加者に対して中島先生から次のようなコメントが前もって伝えられました。

「静物写真はいきなり始めてもうまくいきません。そこで、イメージの訓練を事前にしてください。被写体（素材）をいくつか決め、どのような写真にしたいか、絵コンテをいくつか書く。出来ることなら付け加える物、背景、光、カメラ位置等も考えて下さい。絵コンテどうりに撮れなくても、アイデアの生まれるきっかけになります。ただし、とても出来そうもないことはやめてください。背景は黒・白・茶を用意します。」
というものでした。適切な助言だったと思います。

静物は、風景とちがって被写体に偶然に出会えるということがありません。事前に、何をどのように撮ろうかと、頭の中で思い描き、構成・演出する必要があります。いってみれば自分で風景を作り出す必要があるわけです。その分、静物写真は風景写真より奥が深いといえるかもしれません。ピントグラスを覗くより以前に、手と眼を働かす必要があります。

撮影会では「野菜」「食器」「その他」の三つにグループ分けがされて、それぞれ材料を持ち寄り、セッテイングと撮影が進められましたが、今回の撮影会で最も熱心だったのは先生ではなかったかと思います。撮影のための台所用品や食器などを合羽橋まで行って買い集めてきたのも先生でしたし、撮影のための機材や材料を会場まで車に



積んで運んで来られたのも先生でした。ちなみに参加者は７名でした。

参加してみて構図やカメラポジションやライテイングなど、より創造能力を要求されることが実感できました。ことにライテイングのトレーシングペーパーを使ってソフトな光を作り出す方法などは経験者から学ぶ以外にないことがわかりました。

静物写真は自分の家の中で撮ることができます。風景のように外に出る必要がありません。天候に左右されることもありません。また時間に追われることもありません。大いに静物写真を楽しみたいものです。ことにカメラの操作に習熟できていない初心者にとってはぴったりの方法と思われます。

というわけで、朝９時から始めて夕方６時までの時間が、あっという間に過ぎてしまった１日でした。さて、どのような作品が参加者から提出されるのでしょうか。写真展を楽しみにしたいと思います。

なお、当日の参加者は以下の方々でした。
中島先生、岡崎、田中英司、古川、田中肇、菅野

ドライマウント講習会（８月１１日（土））

荒井　崇

今年の写真展は、ドライマウントによる作品展示を行うことになっている。

ドライマウントは、熱をかけることにより粘着性を生じるドライマウントティッシュを介して、印画紙とミュージアムボードを接着する方法であり、その美しい平面性から、高品位な展示効果を得ることが可能だ。また、印画紙の余白が少なくて済むため、印画紙の大きさを最大限に利用することができる。

この日は、ランドマークタワーの会議室を借りてドライマウントのデモを行った。

ドライマウントの工程は、以下のとおりである。
【１】まず１００度前後に熱したドライマウントプレス機で、マウントするミュージアムボード（２ｐｌｙ）とプリントを乾燥させる。

このとき直に挟まず、必ず大き目のミュージアムボード（２ｐｌｙ）をあと２枚用意し、この２枚のボードで、プリントとマウントするミュージアムボード（２ｐｌｙ）を挟んでプレスを行う。

また、乾燥したプリントとボードは、十分冷やしてフラットになってから次の作業をはじめること。

【２】上記処理の終わったプリントの裏面にドライマウントティッシュを載せ、タッキングアイロンを軽く中央に押し当てて、プリントの中央でと

める。

（タッキングアイロンとは、仮止め用の、小さいテフロンコートされたアイロンである。）

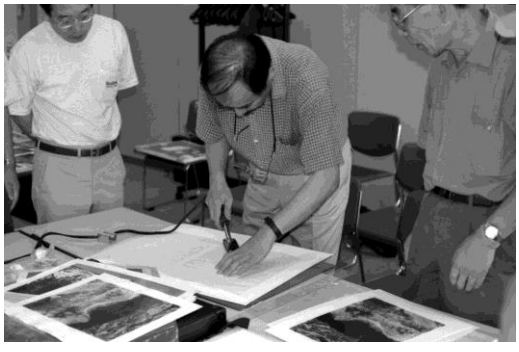
【３】カッターナイフ、サークルカッター等で、プリントの余白をドライマウントティッシュといっしょにカットする。

【４】マウントするミュージアムボードにプリントを位置決めして置き、位置がずれないよう、プリントにおもりを載せる。更に、プリントの一端をめくり、ドライマウントティッシュの一端にタッキングアイロンを押しあてて、ミュージアムボードに仮止めする。

【５】【１】で使用した大き目のミュージアムボード（２ｐｌｙ）にて、上記プリントとマウント用ミュージアムボードをサンドイッチし、ドライマウントプレス機により、６０－１２０秒プレスする。

なお、プレス後は、鉄板あるいはガラスなどで強制的に冷やしてやると、カールを防ぐことができる。

以上の工程に関してデモを行ったが、今回、中



島先生のドライマウントプレス機のスポンジ台座がへたっていたため、一部貼りつきの悪いものがあった。（先生は、後にスポンジ台座を交換したそうです。）

また、今回は、１１Ｘ１４サイズのドライマウントティッシュしか無かったため、半切に関しては、１１Ｘ１４サイズのドライマウントティッシュを２枚並べてトライしてみた。結果、つなぎ目の段差が心配されたが、見た目には問題のないことがわかった。ただし、経時変化まで確認したわけではないので、全く問題なしと断言することはできないかもしれない。

Information

【トピックス】

ギャラリー情報誌 Photo Stage(9-10 月号)に、中島先生の記事が掲載されました。

「もっとモノクロームを楽しもう」とうい題名で、中島先生らがゾーンシステムを日本に取り込んできた経緯や、ゾーンシステムの概要が紹介されました。もちろん、ゾーンシステム研究会の写真展に関しても記載されています。

中島先生と編集者の市井さん

【売ります】

［藤枝義弘］

・タチハラ　フィルスタンド４５
（取り扱い説明書付）　４００００円

［中島秀雄］

１．ポラロイド４ｘ５パックフォルダー
新同様　１９８００円

２．ピーク　引伸ルーペ（おすすめ）
新同様　１９０００円

３．オメガ上皿天秤２００ｇ
新同様　６０００円

４．ラッキータイマー２
新同様　４０００円

５．ポラロイド６００ＳＥ
マミヤプレス型のポラロイド専用のカメラ。
レンズ　１２７m/m, ７５m/m（専用ワイドファインダー付）レンズはシャープ保障 、専用ポラロイドホルダー、ハンドグリップ付
画面サイズ９５ｘ７３、ネガ付のポラロイドも使用可能。　４９８００円

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のため、できるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．今まで同様、手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000
・text ファイル
（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）
ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集者］

荒井　崇